まんが王国・土佐推進協議会　令和元年度第１回総会（概要）

日　時：令和元年９月 19 日（木）13:30～15:00
場　所：オーテピア高知図書館　４階ホール
出席者：まんが王国・土佐推進協議会委員 14 名（内代理出席１名）
　　監事２名

（１）　会長挨拶

（２）　議事

事務局から次の議案について説明があり、承認された。

第１号議案　平成 30 年度まんが王国･土佐推進協議会事業報告及び収支決算

（３）　報告事項

事務局から次の報告事項について説明があり、意見交換が行われた。

第１号報告　令和元年度まんが王国・土佐推進協議会収支予算

第２号報告　令和元年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

・第 28 回まんが甲子園（令和元年度全国高等学校漫画選手権大会）の実施について
・首都圏での情報発信について
・まんが王国・土佐ポータルサイトの運用について
・まんが教室の実施状況について
・まんが塾の実施状況について
・まんが王国・土佐情報発信拠点について

（４）　協議事項

次の協議事項について、事務局からの説明の後、意見交換が行われた。

第１号協議　第６回全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐について
　　（第２回世界まんがセンバツ含む）

第２号協議　令和２年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

（５）　閉会

第２回総会は、令和２年２月中旬を予定

第２号報告　令和元年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

第 28 回まんが甲子園（令和元年度全国高等学校漫画選手権大会）の実施について

【Ａ 委員】

○（中心商店街のお食事券配布の取組について）事前に各店舗に協力をお願いして実施できた。選手は他県から来ているので、食事で街をまわってもらえるということは高知の商店街にとってはプラスになった。まんが甲子園と中心商店街が連携してやっているというところをアピールできるということも、商店街にとって非常に良いことなので、できればもっと広げて、継続してやっていただきたい。

まんが王国・土佐情報発信拠点について

【Ｂ 委員】

○この施設が大きくないということを踏まえたうえで（可能なことを）今後検討していくべきだが、文化庁でまんが原稿等のアーカイブ事業を行っている。ゆかりの漫画家のまんが原稿等の扱いも考えてもらえたらと思う。

○開館日等に関しては、人員体制等が難しいので、平日の午前中の開館が計画されていないことが残念なところ。ただ、観光客等をねらうのであれば、そのへんはどうするのかということを再度検討してはどうか。

【橋口議長】

○原稿の保管については、確かに施設のスペースの問題もあるが、おっしゃるとおり必要な機能だと思う。こうやって情報発信館として整備した以上、そこは簡単に無視できない話なのかなとは思う。

○開館時間等については、そのご指摘もよくわかる。この施設は、条例に位置づけるような施設ではないので、まずはやってみて、かなり柔軟に対応、変更もできる。開館後、そういったニーズ等もふまえながら、変更を考えていければと思う。

【Ｃ 委員】

○すごく楽しみにしている。できることは何でも協力させていただきたいと思う。「高知まんがＢＡＳＥ」という名称はとても素敵。ＢＡＳＥは基地なので、「まんきち」という愛称で通ってくれるといいと思う。

【Ｄ 委員】

○情報発信拠点として、施設の中で、まんが甲子園について広報していくと思うが、この施設とまんが甲子園の本番では、何か連携する計画等はあるのか。

【事務局】

○現在、敗者復活戦をこの施設を整備している旧図書館の近くの高知城歴史博物館で開催している。そういった折にも是非、この甲子園に出場したペン児の皆さんにもお越しいただきたいと思う。また、まんが甲子園のこれまでの資料などを展示しようと思っているので、父兄の方や、まんが甲子園のＯＢ、ＯＧの方もここを目指して、かつての自分たちが青春

をかけた時期を思い出していただくといったことも期待している。

第１号協議　第６回全国漫画家大会議 in まんが王国・土佐について

【Ｃ 委員】

○（会場の）オーテピア、追手前高校は立地的には、とても、中心商店街と連携しやすくてよいと思う。立地はいいが建物の中だけでやっているような感じがする。やっていることが外にわかってもらえるかが心配。

○何か外とつながっているような仕掛けがほしい。知らないところでやっているまま終わらないようにしてほしい。

【吉村部会長】

○よさこい祭りの時にかかっている追手筋本部競演場入口のアーチのようにすれば。あれは許可をもらわないとできないものか。

○ちょうどオーテピアと追手前高校の間にアーチがかかって、全国漫画家大会議開催中というものがあれば、ものすごくアピールになると思う。

【橋口議長】

○どのくらい予算がかかるか（という課題もある）。県庁前の交差点に全国大会開催の公告看板がある。ああいったものであれば。

【尾﨑会長】

○オーテピアでポールを立てればできる。

○道路の上を通すのは他の許可が要る。知事部局だけでなく、警察の問題もある。

【Ｅ 委員】

○オーテピアは、高知市と一緒に運営しているので可能かどうか高知市と話をする。

【尾﨑会長】

○オープニングはどこでやるのか。

【事務局】

○オーテピアの建物内では人数制限があるので、天候の問題もあるが、オーテピア西の広場で行うことを検討中。

【尾﨑会長】

○（外部であれば）参加層も幅広く、通りかかった方等にも参加してもらえる。

【事務局】

○追手前高校の芸術ホールもとても素晴らしい施設。そこも候補にしているが、外向けにはわからないのかもしれない。

【橋口議長】

○そういったしつらえについては、随時、検討したいと思う。外向きに開かれたかたちの工夫を考えたい。

【Ｆ 委員】

○（大会議のゲストの）漫画家には女性の漫画家があまりいないので、そのへんは、聞きに来る人達というのも自ずと男性に偏っていくのではというのがちょっと心配される。

第２号協議　令和２年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

まんが甲子園

【Ｃ 委員】

○出張編集部への持ち込み数が、私が思っているよりすごく多かった。

○私がまんが甲子園で一番すごいなと描き手として思うのは、プロの先生が審査員に来てくれて、職業の世界を持ってきてくれるというのはすごく大事だということ。そして、スカウトマンとか出張編集部が来てくれること。本当は東京へ持ち込みをしないと見てくれないものが高知で見てもらえるということはすごいことだなと思う。

○ストーリーまんがはその場でできるものではないので、かなり前から準備をしておかなければいけない。出版社の編集と直接会うというのも、漫画家の先生と会うのとまた違って、職業、プロの世界というのをものすごく身近に感じる機会でなので、できるだけ、そこに、じかに編集に会ってもらいたいと思う。その２点をまんが甲子園のＰＲの中にも入れ、高知のまんがの団体に「出張編集部に持ち込んだら、すごく面白い」という漫画にしてもらい、それでＰＲしたらいいと考えていた。

【尾﨑会長】

○スカウトの皆さんに来ていただくというのは、本当にこのまんが甲子園の売りで、多分若い人達にとっては良き登竜門になってくれればという思いもあり、いわば、まんが文化の振興、まんがの道を志す若い人を応援するという趣旨からして、ここが、大きなメリットのある事業だと思う。

○必ずしも高知県主義でやるというのでなく、高知の子どもだけでなくて、全国のどの子どもでもかまわないと思う。

○スカウトシップの参加も１１社まで来てくださるようなありがたい状況の中で、こういう取り組みをしているということを大いに全国発信して、いろんなところから来ていただくようにしたらいい。少なくとも中四国くらいから来てくれるようになっていけば、非常にありがたいことだ。

【吉村部会長】

○今年、黒潮マンガ大賞という高知新聞がやっている、プロもたくさん生まれたコンテストが終った。そこに応募していた人達に、まんが甲子園の出張編集部があるといったことの案内ができるよう、高知新聞社などに協力してもらいながら、アピールができたらと思う。

【Ｇ 委員】

○漫画家協会が 60 人体制から 1,500 人体制になったというのは、もちろん、地道な努力というのも必要だが、ＮＨＫが今、アニメーターが主人公の「なつぞら」をやっているように、

ネット（やメディア）を駆使して目的を達成するということも参考になるのではないかと思う。

【吉村部会長】

○今までやってきたことに対してインターネットの活用の仕方というのを勉強しなくてはいけない。簡単ではないが、例えば、スカウトシップ、出張編集部への持ち込みに関して、ポータルサイトで発信して受付できると、かなり身近になるのではないかなと思う。

【尾﨑会長】

○窓口を一本化し、ネットで拡散してもらえばいい。「いきなり東京の編集部に行くのは大変だけど、まずはまんが甲子園で試してみよう」と、良い意味での敷居の低さのある登竜門になる可能性がある。

○来年は全国高等学校総合文化祭の中の一部門としてまんが甲子園が開催される。いろいろな文化系の学生さんが来ていて、かついろいろな文化系の先生が来ている。そういった先生や学生にまんが甲子園の熱気を見てもらうと、「まんが甲子園、うちの学校ももっと参加したほうがいいんじゃないか」というようなことを学校に帰って言ってくれそうな感じがする。

【Ｅ 委員】

○まんが甲子園の課題としては、参加校数が、国内でいうと、例年 300 超えていたところが年々減っている。

○来年度のアンケートは、参加しないところになぜ参加しないかを聞くよりも、参加したところに、どこに魅力があるのか聞いて、そこの魅力を伸ばすほうが確実に参加校を増やす方向性だと思う。

○やはり何よりも知ってもらうことが大事。会長から話があったように、来年の総文祭が絶好のチャンスだと思っている。

○来年度の総文祭、２万人の高校生が集まるが、23 部門のうちで、来年 44 回大会になっているが、初めてまんが部門が部門として認められたということで、非常に大きな、これは絶好の機会でこれを逃してはならない状況だと思っている。

○来年の総文祭がものすごく大きなターゲットなので、ここを逃さないように、予算を思いっきりつけるくらいのかたちでやるべきだと思っている。

○各学校には、今、たくさんの封筒が届くが、教育委員会から来た封筒は必ず開ける。そういう面でいくと、来年、総文祭があって高知県の教育委員会や教育長の名前を大いに活用できるところだと思う。それを全面に出しながら、全国の高等学校、教育委員会にはＰＲしていくべきだと思ってる。

○このまんが甲子園の開催の意義には、まんが文化を推進してということがあるが、このまんが甲子園の、「個人がチームを組んでひとつのテーマを議論しながら作り上げていく。」これが、まさしく新学習指導要領の主体的・対話的・深い学び、そのもの。子ども達が主体的に考えているものを５人で役割分担しながら意見を交換し、テーマを突き詰めて作品

を作っていく。そういうことをしっかり打ち出すことによって、かなり教育委員会なり学校側が、今度、まんが甲子園に魅力を感じてくるはずだと思っている。

○子どもの高等学校の教育上にどういう意義をもつのかというのは、まさしく今、流れがきている時期だと思うので、来年の総文祭の開催とあわせ、しっかりとプロモーションというのを打ち出していくということを県教委も協力するので、是非、事務局と連携してやっていくべきだと思っている。

【Ｆ 委員】

○最近、若い漫画家は、すごく画力はあるが、ストーリーが書けなかったりというのが非常に多い。ストーリーが作れる脚本家を目指していく人達というのも増えているので、まんが甲子園の中でもそういう部門も今後つくる必要性があるのではないか。

○第 30 回大会くらいのときには、ストーリーを題材にしたもので予選というのも考えていったらどうか。

【Ｃ 委員】

○Ｆ委員の目の付け所は、やはりすごい。今は漫画家になりたいが、ストーリーは書かない人が多い。その辺りをうまくリードして新しい流れを作っていけるような、今からの流れに向かって行けるようなことを早急にやらないといけない。

【尾﨑会長】

○第 30 回大会に向けてどういうやり方がいいか検討してもみたい。

<u>情報発信</u>

【Ｈ 委員】

○10 代から 30 代までの人たちに何か訴求するときは、テレビでなくて完全にネットになっているので、ＳＮＳというのをどれだけ利用するかが重要。

○我々テレビ局も、とにかくホームページに人を集める。まんが甲子園を見に来た人でも、そこに来ると「世界まんがセンバツ」の情報があって応募してみようとか、おきゃくのイベントなど何でもいいが、とにかくここのポータルサイトに集める。

○まず集めるためのリソースはある。編集者や、ここから生まれた漫画家、私共のようなメディアも含めて、とにかく、どんどん、ポータルサイトがあることを発信する。

○新しい方が来るのに一番必要なのは、更新の頻度。新しい情報をどんどん出す。逆にそれがまたリツイートされるというようなかたちでの更新の頻度が１つ。

○あとは動画。例えばまんが甲子園や、優勝して喜んでいる画、その辺りも含めて放送しているが、実は、その後の活用も検討して、動く画というのは必ず人を惹くので、ホームページでどれだけ人が集まってくるかというのを目標に一度ＰＲの方法を検討すればよいと思う。

その他

【Ｉ　委員】

○商工業の世界とまんがというのは、どういうふうにつながっているのかなというのを考えたときに、まんがというコンテンツは、自分の頭の中で考えているものを第三者に伝えていく手段としては、非常に有効な手段なのではないかと思っている。

○やはり、高知県の子ども、とさっ子は、まんがにすごく親しんでいるというのをＰＲして、我々としても、高知から、仮に学校を卒業して県外で活躍される子どもとかが、そういう社会の中で生き抜いていくためのものとしてまんがを売り込んで、そして、たくさん儲けていただいて高知に帰って来てもらう。こういった流れができれば、より価値が 10 年先、20 年先に出るのではないかと思いながら、今日はお話を聞かせていただいた。

【Ｊ　委員】

○高知県はまんがにおいて、こんなにすごいんだということを県民自体があまり知らない人もいるのではないかなと思う。

○そういったところをもっともっと我々が自信をもって、誇りをもってやっていく必要があるのではないかと思う。

○中土佐町には、土佐の一本釣りという青柳祐介先生の作品の舞台となった漁師町がある。町内の久礼八幡宮というお社の御旅所の横には、青柳先生の石像があり、鰹供養碑という碑も一緒にある。こういったところを本当にマニアの方が訪れて、写メをたくさん撮ってインスタにのせたりされているし、同じく町内の大野見というところにまんが神社というのがあり、このまんが甲子園が始まって少しした頃は、かなり、必勝祈願に子ども達が来ていた。

○総文祭の話も聞きながら、ここをもう１回復活させていかないといけない、観光振興にもつなげていきたいと思った次第。

○やはり、まんがというものの素晴らしさ、そして、すごさというものを今一度見直す、そういう時期がきたというふうに思った。